

明倫短期大学学会報告

月例研究会抄録

平成21年度明倫短期大学学会月例研究会は、平成21年4月23日の第37回から10月22日の第42回まで計6回開催された。7年に及ぶ42回の研究会における総演題数は79に上った(通算回数は前身の明倫短期大学研究会からのカウント)。歴年の演題名等は学会HPをご参照下さい。

第37回(通算第120回): 2009年4月23日(木)

(座長: 本間和代)

実社会で経験したこと

大沼誉英(歯科技工士学科)

歯科技工の社会において歯科補綴装置を製作する際に求められる精度は、歯科技工学校で習得するレベルよりはるかに高く、就職した直後はそのギャップに戸惑うことがある。

実社会では常に実体顕微鏡を使っての作業が行われており、全部鑄造冠の適合性と鑄造性の問題点が肉眼レベルで確認できないものであっても許されるものはなかった。それらの問題点はワックスパターンの厚み不足により発生する金属の鑄込み不足や、鑄造の際の溶解温度によるものなど単純な要因であり、より注意力を持てば解決できる程度のものであった。

教員となった今、歯科技工士学科卒業後の8年間に実社会で経験を積み、通用した技術を教育現場で生かし、社会に出てから経験するギャップを少しでも小さくして即戦力となる歯科技工士の学生教育に役立てていきたい。また、今後も鑄造の研究を通じて自分のテクニックも向上させ更なる鑄造性と適合性の向上について追及していきたい。

日常生活下での糖質水溶液含嗽にともなう歯表面のpH変動

小黒 章(歯科衛生士学科)

歯表面には食事・喫食の度、常在微生物叢による食餌糖基質の代謝/発酵により乳酸を主とする有機酸が産生される。それによる歯表面のpH低下は歯質ヒドロキシアパタイトないし磷酸カルシウムの溶出(脱灰)を誘発するが、pHの上昇とともに脱灰は修復(再石灰化)され、齲蝕発症はこの絶え間ない脱灰-再石灰化の傾きに依存する。実験的条件下でステファン曲線に

関わる主要因子は歯垢のaging, 唾液流量, 唾液酸緩衝能, さらには、唾液ないし歯垢の $[Ca^{2+}]$, $[P_i]$ などとされる。実験的条件すなわち歯垢のagingとは3~4日間、歯磨きをしないことを指すが、齲蝕は日常生活から起こるのであり、その際の歯表面のpH変化と齲蝕活動性/齲蝕経験の関わりには不明部分が多い。5種の10%糖質水溶液による含嗽時の歯表面(口腔内6箇所)pH変化測定ではpH5.7以下を示した箇所(率)は、蔗糖0.46, ぶどう糖0.31, 麦芽糖0.15, であり、キシリトール, ソルビトールによるpH低下は観察されなかった。このpH降下には速効(5分)型と遅延(10分)型が認められ、pHがどの部位で降下するのは予測できない。

第38回(通算第121回): 2009年5月27日(水)

(座長: 木暮ミカ)

歯科保健指導学習への動機づけ

小野真奈美(歯科衛生士学科)

歯科衛生士業務の一つである「歯科保健指導」を行うには、専門的知識・技術, 問題発見の解決能力, コミュニケーション能力など総合力が必要となる。そこで歯科保健指導関連5科目に興味をもたせ、学習意欲の向上を図ることを目的に歯科衛生士学科1・2年生を対象に「家族の口腔内観察体験」を実施し、到達目標についての自己評価と感想を集計、分析した。

両学年とも身近な人の口腔内を観察し、様々な年代の口腔内状況を把握することで歯や口腔に関心をもつ良い機会となった。また、家族の口腔環境を良い方向へ導きたい、もっと歯科保健指導ができるようになりたいなど歯科保健指導科目への動機づけに繋がったと思われる。さらに、自己評価によって、日頃の実習の到達度を自覚することができ今後の目標設定にも役立つと考えられる。

今後も学習進度に合わせ、家族の口腔に関心を持ち、継続した歯科保健指導・口腔管理を実施していきたい。

歯科技工士教員として専攻科の活動を振り返って

丸山 満(歯科技工士学科)

生体技工専攻科は総合力の高い歯科技工士を育成するために、平成11年4月に開設された。入学生は今年度が7名と増加傾向にあり、29名の修了生(8回生)を輩出してきた。

明倫短期大学学会報告

在学中は、症例実習や患者担当制の実習形式から歯科医師と歯科衛生士との連携、プロ意識、患者の見える歯科技工から臨床力と実践力を高めるとともに、症例研究から自己評価力を養うことで、歯科技工士に求められる資質の向上を目指した。さらに、新潟国際ビジネスメッセ、インターンシップ、ボランティア、学外研修から社会性を養ってきた。これらは、学生の感想からも十分に教育効果があったと考えている。

さらに、平成20年度より「専攻科カード」を導入し、入学時の修学目標および在学時の情報を記録して教育や就職活動に活用するとともに、各学生には個別対応の指導体制をとっている。

今後も臨床力、実践力、社会性を重視した総合力の高い歯科技工士の育成を目指していきたいと考える。

第39回 (通算第122回) : 2009年6月25日 (木)

(座長: 大平芳則)

歯科衛生士学科学生の食生活状況から考える栄養指導教育

平澤明美 (歯科衛生士学科)

「健康日本21」では、朝食を欠食する人の減少が上げられ成人の目標15%以下とされている。しかし、平成19年国民健康・栄養調査によると朝食欠食率は年々上昇傾向にあり、20歳代女性が24.9%で目標値をかなり上回っている。そこで、平成12年～平成21年に本学歯科衛生士学科に在籍した、のべ1,083名に質問紙調査法により食生活状況の調査を実施した。(1)歯科衛生士学科学生の食生活状況は、全国の同年代女性より良い傾向にあった。特に、朝食欠食率は、1年では1人暮らし者と、寮生・自宅通学者の間に有意な差が認められた。また、寮生の臨地・臨床実習中の学年と1年の間にも有意な差が認められた。(2)「栄養指導」関連の授業が終了した学生は、栄養や健康についての知識があっても、臨地・臨床実習の影響があり、実践に結びついていない状況が示唆された。(3)授業で健康・栄養状態の改善について、実生活で継続可能な取り組みが必要である。具体的には①2学年後期の「栄養指導・演習」において、「健康と食事」をテーマに取り上げたグループ学習②簡単な朝食メニューの紹介や学生食堂との協力などを今後検討したい。

クラスデンチャーの可能性と限界 ～歯科技工士のアイデアを解き放せ!～

飛田 滋 (歯科技工士学科)

現在、日本の補綴歯科治療は、その技術と歯科材料の発達に伴い目覚ましい進歩を遂げているが、多種多様な部分的歯牙欠損症例の治療法は、クラスデンチャーに依存するところが多い。その構成要素である支台装置と義歯床の設定基準は明解でなく、製作者の裁量に委ねられている。高齢社会では有床義歯の補綴治療が占める比率は、年々増加すると予想されている。ゆえに患者がより快適にクラスデンチャーを使用するために、歯科技工士はエビデンスのある学識・技術を基にアイデアをフルに発揮することが必須である。今回は①鑄造鈎のアンダーカット量と維持力の関係②基本的鈎腕形態③鈎腕の内面研磨による維持力の変化、以上三項目の測定結果を提示しながら、クラスデンチャーでも如何に審美的かつ機能的に製作できるかを実際の臨床例を用いて紹介した。固定観念にとらわれず、難局に立ち向かう技術力こそが歯科技工士の持ち味であろう。

第40回 (通算第123回) : 2008年7月23日 (木)

(座長: 江川広子)

国語の修得能力と思考能力の 関係について

栗崎由貴子 (専攻科保健言語聴覚学専攻)

国語の修得とは、まず名詞を覚えてから動詞を覚え、それらを繋ぐための助詞を獲得し、文体を形成して表出するといった機械的な順序をたどるものではない。人間が何かを伝えるということは、まず、表現しようとする内容を自覚し、それをその国民特有の言語によって形成し、多様な文法に従って伝達するということがある。また、表現内容がより広がりを見せ、それが論理的思考となって展開されていくためには、相応の日本語能力の獲得も必要になる。豊かな国語力を身につけるということは、日本語特有の心的表象を獲得しながら、その思考を自らのものとして「私」という人格の形成つなげてゆく過程でもある。このような段階を経てはじめて、ヒトは「人」として言語をコミュニケーションの道具として使いこなせるようになるのである。